

# ‘She’ の誕生

——化合変化か，自醸変化か——  
 ——英語の語源と由来——

菅 沼 惇

## 目 次

1. 現代英語の 3 人称単数女性代名詞の不思議
2. 古期英語期の場合——heo, hie
3. 中期英語期の場合——ho, ha, a, he, zheo, scæ, sche, she
4. 一体何が起こったのか？——化合変化か，自醸変化か——
5. 結び

### 1. 現代英語の 3 人称単数女性代名詞の不思議

読者の皆さんの周知の，現代英語における人称代名詞の 3 人称女性単数形は，主格が she で，所有格が her，そして目的格も同じく her である。右の表 1 にまとめて置き，実際それらが文中で使用されている状況を次に例示する。なるべく同じ文例が，現代英語・中期英語・古期英語等々というように，各時代での変容がかなりよく解るように，各時代訳の聖書から引くように努めることにする。

表 1. 3 人称代・単・女

		人 称	III
		性	f.
数	格		
sgl	nom. poss. obj		she her her

(1)<sup>1)</sup> a. then sent she one of her maids there ... —EXODUS II\_5

b. She then flew out and could not find where she set her foot,  
 ——GENESIS VIII\_9

c. And made that rib, that ..., into a woman and led her to

注1) この現代語訳は，OE 版・ME 版・AV 版を参照しながらの，なるべくそれらに遂局的に合わせるようにとの，筆者による訳である。尚，点線は筆者による省略の印，又下線も筆者による便宜上の印である——今後特に断らない限り同じである。

Adam—*GENESIS* II<sub>-22</sub>

d. if he have betrothed her unto his son, he shall deal with her after the manner of daughter. *EXODUS XXI*<sub>9</sub>

それらをたゞ単純素朴に瞥見するだけで、我々は何かを感じるであろう。何であろうか？それは、この she, her, her の中で she と her, her の間に何か対立音を感じる、即ち she だけに 's' 字が、又 [ ] 音が余分にあるということであろう。いやあ、もう常日頃中学生の時以来、she, her, her と発音も調子よく、口調に慣れてしまっていて、異質な音等という感じはなく過して来ているのであった。

たゞ場合によって、人によって「ウン？何々々？アレッ?!」と思う人も無きにしも有らずとなるかも知れない。そこで、そのことについては何か訳があるのかどうなのか、ことばの探険——今回は、やはり長年の間のことばの森の中の探険——に出かけることになる。これは推理的探険になるかも？先ず英語の原点、古期英語時代ではどういう形態の語であり、どのような使われ方であったかを探ってみよう。

## 2. 古期英語期の場合——heo, hie

英語の原点、古期英語の時代においては3人称の人称代名詞の単数女性形は、主格が heo や hio 又 heo で、属格が hire, hyre, 対格が hi(e), 与格が hire, hyre というようになっていて、実際の文中では下記のように使われていた。珍奇な文字や語が現れるかもしれないが、じっと見つめると、はてさて、ウンそうだ、これは現代英語のあの語では？そうだそうだ、そうだろう。辞書を引いてみよう——と言っても OE Dict. は簡単にその辺にはないので、Mod E の辞書<sup>2)</sup>、大きいのがよい、で、その現代英語を引いて

注2) 筆者は辞書には特別の興味を示さないが、その筆者でも英語の辞書は良いと思っている——いや語源だけにしか興味はないが——、日本語の国語辞典にもその良さが欲しいと思っているのだから。そしてその辞書といっても、OED——ただそれだけ読んで出来た論文もある位だと、学生にはひやかしている程だ——は最たるもので、これに敵うものはない、それだったら使用例文も面白い。

からその項目の説明の末尾（辞書によっては冒頭に出しているものもある）に、語源解説がしてあるので、そこで「あったぞ！ホムウ、やっぱりそうだったか！俺の推理力も大したものだな。」となったりする。そうやって行く中に段々と解ってきて、続々とOEの、現代に残っている語ならば、殆どどの語も解説できるようになる——幾つもの興味溢れることばの推移の道が、法則の縞模様が体得・経験できてくる<sup>3)</sup>。もうそうなったら止められなくなる——特にOE等、やはりそういうルーツを探る学問は、探険心と同じで興味をそよる、くすぐる、夢想の世界へ引き込もうとする性格なので、喜びを、期待の心を躍らせることになるものだ。天文学に似ているのかな？原子物理学に似ているのかな？動植物発達論に似ているのかな？

年老いて、若しや楽しみ、喜びの少なくなった人にはもってこいの道楽かも知れないのだ。

と、まあ、そういうことだから、今から一寸OEのその楽しい世界に遊んでみよう。

- (1')<sup>4)</sup> a þa sende heo ane hire þinene þider ... —EXODUS II<sub>5</sub>  
 b. Heo ða fleah ut 7 ne mihte findan hwær heo hire fot  
 alette, —GENESIS VIII<sub>9</sub>  
 c. 7 geworhte ðæt rib, ðe ..., to anum wifmen 7 gelædde hi  
 to Adame. GENESIS II<sub>22</sub>  
 d. Gyf he <hi his suna> beweddað, do hire æfter dohtra  
 gewunan. EXODUS XXI<sub>9</sub>

3) その書物を各ページ観音開きにかけて、両ページの各段・各行を左へ右へ、右へ左へと眼を運べば、そこに繰り広げられる英語史各時代の各断層——語対語、句対句、節対節、文対文；冠詞の発達・名詞の発達・関係代名詞の発達 接続詞の発達・語彙の栄枯盛衰・人称代名詞の発達等々——で化石をルーツを探して頭の摘籠に採取できる、その書物の名前が下記注4)に出ている。

4) こゝに挙げる用例文の中 GENESIS I～XIまでに関するもの、及びそれらに各々対応する(1)及(1')の用例文は拙編(1990)『GENESIS IN 4 VERSIONS——OE, ME等への入門として』に所載のものからである。

尚この(1')で現代語訳の併記のないものは(1)を見ればよい。

これらの諸用例文中に、それぞれの格で使用されている通り、古期英語においては3人称単数の女性代名詞形は、*heo, hire hi, hire* と四格共に‘h’で始まる語、[h]音を含む語であったのだ。それらの語いずれにも、何処にも‘s’字は無く、[ʃ]音はなかったのである。

ここで、英語の原点での、3人称単数女性代名詞の各格での形態がよく理解できて、又何時でも参照できるように表にして置く。

表2 OE 3人称代・単・女

		人 称	Ⅲ
		性	f
数	格	nom.	<i>heo, hie</i>
		gen	<i>hire, hyre, heore</i>
		acc	<i>hi, hig, hy</i>
		dat	<i>hire, hyre, heore</i>
sgl.			

3. 中期英語期の場合——*heo, he, (h)a, ʒheo, scae, sche, she*

長い年月が経過すると人も世の中も、ひいてはことばも推移・変化ということが起こることもありうることである——たゞでさえそうであるが、外ならぬ Norman Conquest の大変革に伴って一時期は滅亡の危機にあって再び盛り返して来た頃の英語の姿は往時とは大変異なるものになってしまっていたと言われているが、中期英語も丁度その頃のものを例にして、先ず挙げてみよう。

(1<sup>7</sup>)<sup>5</sup> a. ..., sche sente oon of hir seruauntessis, ... ——EXODUS

II -5 (後版)

b. and whanne the culuer found not where hir foot schulde

注5) これらの例は Wycliffite 版からののだが、それには前版 (c1384) と後版 (c 1388~95) とがある。ここに採ったのはその後版の方——注4)で触れた拙編書に採り入れているのも後版の方である——で、後版の方が、より人々に解り易い英訳となっているからである。それと比べて前版の方は Vulgate Latin 版の忠実な直訳で、又その為にかえって興味深い現象が多く、筆者もそれを利用して拙論 (1993 b)「独立分詞構文——変る, かわる, 言葉は変わる——Ablativus ; Dative ; Objective ; Nominative——英語の語源と由来——」香川大学一般教育研究第43号の小論をなした。

- reste, sche turnede azen to ... —GENESIS VIII<sub>9</sub> (後版)
- c. And ... God bildide the rib which ... in to a womman, and  
brougte hir to Adam. GENESIS II<sub>22</sub> (後版)
- d. if he weddith hir to his sonne, he schal do to hir bi the  
custom of douztris; EXODUS XXI<sub>9</sub> (後版)

このように OE 版とその対応例を見比べてみると、所有格・目的格の点では、OE 対格形 hi, hig は消失して、与格形に吸収され、目的格形 hir となっており、それは OE の与格形 hire と殆ど差のない形なので、判り易い形になっているが、主格形だけは OE heo が ME sche とか she になっているので、これはやはり、大変ではないのだが、まあ幾分変わったものになっているなということになる。

そういう訳であるからこそ、その OE heo→ME sche, she なる結果を生み出すに至った。その動因は何だったのか？その過程はどうだったのか？というように、‘she’ の起源について研究者の科学心は向けられて行くことになるのである。こゝでも中期英語期のこの女性人称代名詞の姿、この期は主格は特に色々な形のものであったのである、を表にして置く。

表3 ME 3人称代・単・女

		人称		III
		性		f.
数	格			
	sgl	nom.	heo, ho, (h)a, he 3heo, 3ho, scho, scæ sche, she	
		poss obj	hire, hir, her hire, hir, her	

そこで、次にはその ‘she’ の発生の源の問題の探険に入ろうと思うが、その前にもう少し文献から、表3に挙げた ‘scæ’ の使用例を、聖書以外の作品——*Anglo-Saxon Chronicle* から引いて置く。

- (2)<sup>6)</sup> a. þa þe king was ute · þa herde þæt sægen · 7 toc his feord ·  
7 besæt hire in þe tur · 7 me læt hire dun on niht of þe

注6) 原典の ‘・’ 印は、中位の高さに置かれているのと、低位の高さに置かれているの二通りあるようで、前者を途中切り、後者を文末終止であろうかと判断した。

( ) 中の現代語訳は、A-S Chron (1861) Vol II Translationを参照しての、筆者によるなるべくの逐語直訳である。

tur mid rapes · 7 stal ut · 7 scæ fleh 7 … : pærefter scæ  
ferde ouer sæ.—A—S *Chron* MILLESIMO. C. XL 底から27行  
目～

(=When the king was out, then he heard that say, and took  
his force, and beset her in the tower, and men let her down  
at night out of the tower with ropes, and she stole out, and  
fled and … Thereafter she went over sea, …)

b. God wimman scæ wæs·oc scæ hedde litel blisse mid him·  
—A—S *Chron* MILLESIMO. C. XL 底から15行目

(=A good woman she was, but she had little bliss with  
him,)

これらは、筆者が筆者の「英語の語源と由来」エッセー・シリーズ<sup>7)</sup>の二つの原稿作成中に、「wimman」とか「noht」等の語例標本及びその使用文例標本の採取作業を同書でやっている中に、その他の用例品目にも珍しいものが色々あって興味深く眺めていたのだが、その中の一つがこゝで多用されている語「scæ」で、それを含む面白い好例文二つをこゝに引用した。

これらの文例の記述部分はA—S *Chron* の殆ど最終部分であり、その周辺部は、英語史上でもOE期とME期の境界時期を思わせる程かなり明瞭な各言語品目の推移の実態を見せているとして注目されても居るところである。

#### 4. 一体何が起ったのか？ ——化合変化か、自醸変化か——

読者の皆さんが最初第1節で感じた‘she’と‘her’における差は小さなものであったらどうか？英語という一つの言語の研究者に知らされて、そんなものかなと感じてみた、しかし小さな驚きであったらどうか？それ

注7) 拙論(1990d)「‘Woman’の語源——ことばは引き合う——英語の語源と由来——」  
香川大学一般教育研究第38号、及び拙論(1991b)「Notは一体何なのか？——  
nowiht, noht, not——英語の語源と由来——」香川大学一般教育研究第40号。

が第2節で新たな驚きに出会い、そして更に第3節で又新たな驚きに浸ったであろう。

私は今、それぞれ小さな驚きだったことを繰返し指摘した——それ程この‘heo’と‘she’の間の差には、大差がないのである、大きい落差が感じられないのだ。

であるから、この問題——‘she’の誕生——は、案外身近な問題、即ち‘she’の近辺から、‘she’そのものから、生れ出た変化だったのか？——いや、そうではなかった、‘she’が誕生したのであったから。

それでは、英語の原点であるOEの当初の当該人称代名詞‘heo’の近辺から、或はそのもの自身から生れ出た変化であったのだろうか？

松本清張は偉人であった——殆ど作品を読もうという意欲もなく、時間も無かったので、余り知らないが、TV映画等で知る程度において、その歴史作家・ノンフィクション作家としての推理力の鋭さ・偉大さには頭が下がる思いで、学生にも脱線して気を吐いている通りである——が、言語学の分野でも、時々、しょっ中、この推量というものを、楽しくやっらいと思っている。じゃあ、その結果「woman ネ、ウン、womanの語源は何だろう？ wo-とmanか、いや wom-anでもないな、もう切れない。さてそこで一寸ばかり推理力を働かして、ット、ウンそれにな、プラスの空想力を一寸加味だよ、ホラ補助線を点線を出してみてもっと、womb-というのとmanとかどうか？これなら一寸語学があるぞ！…」というような空想的推量も面白いことかも知れない——しかし言語学的清張先生はもっと地についた、即ち学問的知識の上に立ちながらの、空想なら空想でいい、プラス推理でなくてはならない<sup>8)</sup>。

一寸それをやってみよう、‘heo’と‘she’とを重ねて見るのである、吾々は第1節から第2節まででその両語の知識を得た——地についている——のだから。

こゝでは、どうも重ねにくいのだが——‘sheo’となる。となると、殆

注8) 前掲拙論(1990d)「Woman'の語源——」参照。

ど〔〕音だけがくつきりとその差を浮び上げていることが判る。

$$(3) \quad \begin{array}{r} \text{heo} \\ +) \text{she} \\ \hline \text{sheo} \end{array}$$

(4) heo と she の差は〔〕音である。

これは何処か出てきた答であった——見覚えがある（第1節）。それでは結局どうなるか？だ。後は決まっている。

(5) 〔〕音を探せ！

以上一寸地に付いた、空想プラス推量の世界に楽しく遊んだ。それでは次は専門家達即ち英語史研究家達はどのように科学しているのでしょうかということを見ることにしよう。

#### 4.1 化合変化説

この説にまあ化合変化説というような名称を付けてみよう——まあ、重合の方がよいかも知れない、メチャメチャに化学変化だという訳ではないのだから、そうだ化合と混合とがあったのだった、混合か、重合がよいだろう。

未だ決着できたという程の研究結果ではないので、どうもこういうような理論付けのプロセスも可能かshれないという程の、プロセス的な考え方である。そしてこの説は、早い話が、たった今上で、空想付きの推量の話をした、簡単に言うと、あのやり方なのである。

先に、中期英語時代の女性人称代名詞の関係の処で(2)を中心に OE heo とは一寸変わった scæ とか sche, she の出現について実例を示した。

そこにこの重合変化説を以て説明すると次のようになる。即ち、それ迄は OE 形 heo を使っていたのであるが、段々と、ある何らかの要因——それについては後述する——によって、scæ を使いたい、sche を she を、という事になって行ってしまった。

そしてその重合の対象となったのが、heo と 'seo' だったのである。この語は OE 指示代名詞の女性形であった。実験してみよう。



(6) 
$$\begin{array}{r} \text{heo} \\ +) \text{seo} \\ \hline \text{sheo} \end{array}$$
 又は sho, scae, sche, she

(7) [heo] + [seo] → [ʃeo] : (音化合)

そのことが惹き起こされた根拠は次の通りである。

(8) 重合変化説の根拠

(A) OE 期には人称代名詞と指示代名詞が、それぞれ性・数・格で各対応的にあり、——Mod E では指示代名詞 that は女性代名詞だと特定されているものではない——平行して使われている<sup>9)</sup>。だから、人称代名詞があるのに、わざわざどうしてこんな処で、指示代名詞を選んでいるのだろうかと不審に思いたくることがある<sup>10)</sup>——そういう使われ方の事例も下で挙げる。そういう訳で、人称代名詞 heo と指示代名詞 seo の重合が起こっても不思議ではない。

(A') Old Norse においてもそうだった——ひょっとすると、もっとひどかったのでは? ——OED にも簡単にそのことが触れられているが、指示代名詞が人称代名詞と同じように使われていたのだ。

(B) ME 期には指示代名詞は、男性・女性形は消え失せて、中性の、しかも主格・目的格のみの that が残るだけとなる。従って女性指示代名詞 seo が人称代名詞に融合化されても不思議ではない。

(B') OE 指示代名詞 3 人称複数形の主格・対格形 'pa' は、ME で po 又 tho となったが、その tho が、ME 新参の 3 人称複数人称代名詞の主格・目的格形 they・them の代わりに、或はそれらと平行して、使われることがよくある。(この現象も(B)の助けとなる。) 事例下記。

(C) (これは、次の自醸変化説とも共有の根拠になる筈だが) OE 期の人称代名詞の、単数男性主格 he と、単数女性主格 heo を受継いだ

注9) 私の臨場感では、定冠詞と関係代名詞としての使用が多く、独立して主語や目的語として使われている場合は少ないようではあるが。注11)に付記の拙著(1993)参照。

10) 又そういうようなことについて観察し、まとめるような学問があってもよいだろう——ピーコンを灯しておく。

ME期では、更にそれぞれの異形；ha, a；he, ho, ha, aもあり、又単数女性主格形は、3人称複数主格形 hy, heo, ho, he, ha, aとも混同され易い——いや実際に混同が起こっている——混乱状態にあったので、それら両方と何らかの区別をしようとする勢いも起こって不思議でない。

こゝで(A)及び(B')に関する実用例を付記する。

(9)<sup>11)</sup> (8のA) の実例示

a. …, 7 nam Sephoram his dohtor to wife. Seo cende him sunu.—

*EXODUS* II<sub>-21~22</sub>

(=…, and took Zipporah his dau hter to wife. She bore him a son.)

b. … 7 nam wif on his agenum cynne. Seo geeacnode 7 cende sunu, —*EXODUS* II<sub>-1~2</sub>

(=… and took a women on his own kin. She conceived and bore a son,)

(10)<sup>12),13)</sup> (8のB') の実例示

a. and God made sterris ; and settide tho in the firmament of heuene, that tho schulden schyne on erthe, and that tho

注11) 拙著 (1993) 『OLD ENGLISH HEPTATEUCH の言語研究』II. 4. 2に所載。

注12) 拙編 (1989=1990) 『GENESIS IN 4 VERSIONS——OE, ME等への入門として』より。

尚sterris=stars, seig=sawである。他に綴りの少し変わったものもあるが現代語訳は付けないので各自判読のこと。判読は又楽しいことである。先に OE を楽しんだ。今度はMEを楽しむ——あれ程難しそうな OE を初めにやって解ったら、今度MEになると非常にMEが易くなる、MEが易いなんてことは大変なこと！もう脱け切れない楽しみの底無し泥沼に入り込んで行っているのだろう。

13) 尚 thei の使用例をこゝに付記しよう。前掲拙編 (1989=1990) からである。

イ. And the igen of bothe weren openid; and whanne thei knewen that thei weren nakid, thei sewiden the leeves of a fige tre, and maden brechis to hem silf —*GENESIS* III<sub>-7</sub> (後版)

注 igen=eyes (備考：本書を観音開きすれば左右にVL. oculi, OE eagan, ME

schulden be before ———GENESIS I<sub>-16~18</sub> (後版)

b. And God seiz alle thingis which he made, and tho weren ful goode ———GENESIS I<sub>-31</sub> (後版)

備考：それらの、OE版での対応箇所は、順に hi, hi, (hi), hi——全て主格即ち they の意味、(hi) は顕現ではないことを意味する——であり、指示代名複数主格の a は使っていない。

以上が筆者の所謂重合変化説であるが、こういう考え方の本家本元の研究者には Wyld (1914<sup>1)</sup>、Sweet (1951) 等がいるので、どんなものか参考に、前者のを注14)に引用しておく。

izen, AV. eyesとパノラマで小英語史の1コマが繰り広げられて、沢山次から次へと楽しみが繰り広げられることになっている。)

他の語には——izen もそうだろうが——少し異綴りがあるが付注せず、又現代語訳も併記しないので判読のこと

ロ. Werfor a man schal forsake fadir and modir, and schal eleue to his wif, and thei schulden be tweyne in o Fleisch. ———GENESIS II<sub>-24</sub> (後版)

注 cleue=cleauē (古, くつつく=stick OE clefien), その他は判読を。

#### 14) §302 Feminine Singular

The origin of the mysterious Nom form *she*, which has been the only form in literary English at any rate since the middle of the fourteenth century, is a puzzle that has never been satisfactorily solved. It may be a kind of blend between the old Fem. Art. and Demonstr., *sēō*, ME [s<sub>̥</sub>jō] and the old Fem. Pers. Pron. *hēō*, M.E. [h<sub>̥</sub>jō], but this is pure conjecture.

It will be well to give first an account of the earliest appearance, and the distribution of those forms of the Fem. Pron. which are either the ancestors or close relations of Mod. *she*, and then an account of the numerous other forms used in early M. E. with the same meaning.

The earliest appearance of any pronoun at all like *she* is in E. Midl. in the latter part of the *Laud Chron.* (middle of twelfth century), where *sæ* is fairly frequent. *Orm*, fifty years later, does not know the form at all, nor does the *Bestiary* of 1250. *Gen. and Ex.*, however, of approximately the same date, has *she*, and *sge*= [s<sub>̥</sub>jē], together with other forms to be considered below. *She* and *sho* appear in *Havelok* (1300), but not in *King Horn*, about the same date.

It appears from this since these are all E. Midl. texts, that the new form was

## 4.2 自醸変化説

これは、まあ簡単に言うと、先ずあの東京の下町言葉だったか、「火箸」のことを〔シバシ〕と言うだろう。あれと同じようなことが英語でもこの 'she' の発生に際して起こったのだということである。

(1) ヒバシ アクセント移行 シバシ

備考：但し、ある時までずっとヒバシの音調で生活していた人達が、何かが原因となって何時からかヒバシ音調へと移行して行く中に、その〔ヒ〕が〔シ〕へと変質したと考える。又アクセント移行

established, on the whole, pretty firmly in the East Midlands, at any rate from the middle of the thirteenth century. The W. Midl. texts show *sche*, etc., coming in by the middle of the fourteenth century. Thus *Will of Pal* (1350) has *sche*, *she*, but also *he* and *hue*; *Allit. P* has not the *she*-form at all, only *ho*; the author of *Piers Plowman* has *sche* but also *heo*. Audelay (1430) has generally *heo*, but *che* and *she* occur a few times each; *sheo* occurs twice (Rasmussen, p 78). Myre, however (c 1430), has no instance of such a form as *sche*

The more polished fourteenth-century writers of the Midlands, Mandeville, Chaucer, Wycliffe, and Gower, all have *sche* or *she* only, which coincides with the prevailing usage in the London dialect of this period. The London documents (Morsbach), however, still have a few examples of *zhe*. The later London Charters have *she*, *sche* only (Lekebusch, p. 107). Northern Engl. and Scots texts have *s(c)hō*

Any form such as *sche*, *s æ*, etc., appears to be unknown during the whole M. E. period in any pure Southern text, whether Kentish or Saxon in dialect, apart from the quite exceptional *shee* which occurs once or twice in Trevisa instead of his usual *heo*, *hue*, cp. Morris's *Introd to A3enbite*, p. i

We may say, then, that *she*, whether it actually arose in the Nth., or the E Midl., or in both independently, must have penetrated into Literary and Standard Engl from the E Midl. dialect.

NOTE. There is, perhaps, something to be said for Lindquist's view, *Anglia* 44, that *she* arose from the -s of 3rd Pers. Pres, combining with [heo=;ō] in versions such as *cumes heo*, etc., in the Nthn. dialect

は、色々な要因——純粹の言語学的なものもあろうし、何らかの社会言語学的とか、言語心理学的なものもあろう——から起こりうるものであるし、又実際に日常身の廻りでもそういう現象を感ずるであろう。

但し、また、 $\text{E}[\text{バシ}] \rightarrow \text{シ}[\text{バシ}]$ は起こり難いであろう。何故かと言うと、これら  $[\text{E}]$ ,  $[\text{シ}]$  は主音節なのであるから。主音節部分は、人間が発音する場合に、いくら人間の生来の不精さからでも、おろそかにしようとはしにくいからである。

それと較べて、(11) の  $\text{シ}[\text{バシ}]$  の  $[\text{シ}]$  は副音節部分なので、人間が発音する場合に、段々となおざりになり易い最たるものであるからだ。

- (12) OE 3人称単数女性代名詞の heo というその語自体からの何らかの動因による自醸的発生<sup>15)</sup>。

段々と具体的に言うと、先ず極めて単純に言うと、

- (13) heo の音  $[\text{hé}o]$  アクセント移行  $[\text{ } \text{e}ó]$

もっと細かく言うと、

- (14)  $\left\{ \begin{array}{l} \text{hé}o \rightarrow \text{he}ó \\ \text{hío} \rightarrow \text{hi}é \end{array} \right\}$  とアクセント移行が起こった時、その発音即ち

$\left\{ \begin{array}{l} [\text{hé}o] \rightarrow [\text{hj}ó] \\ [\text{hie}] \rightarrow [\text{hj}é] \end{array} \right\}$  では新しい音  $[\text{hj-}]$  が自醸され、その音が

段々と  $[\text{hj-}] \rightarrow [\text{ç-}] \rightarrow [\text{ } \text{-}]$  と変わって行った。

と言うことになり、それが結果的には、次のようになる。

- (15) この  $[\text{hj-}]$  又  $[\text{ç-}]$  音を文字化した語形が  $\text{þho}$  又は  $\text{þhe}$  であり、又  $[\text{ } \text{-}]$  音の方は、当然の  $\text{scæ}$  とか  $\text{sche}$ ,  $\text{she}$  の方なのである。

注15) 名称は別だが、以下のそのような考え方は、日本では中尾(1972)での紹介解説、国外ではMosse(1952), Brunmer(1960~62)等の考えを参考にしながら、筆者なりにまとめたものである。

## 5. 結 び

以上、全く相反する——と言っても、別に大変な差はない、先に言っていた通りに、どちらにせよ、その身の回りかそれ自体からなのであるから——二説を組立ててみた。私自身どっちにしようかと、自分で組立てておりながら、迷う——楽しく、嬉しく迷う——程のことである。

人間何事も同じであるが、何かしら、どっちに決めなくてはいけないとか考えることが多過ぎるようである——源氏か平氏か（平氏にも良い者もいれば、悪いのもいる。源氏にも悪いのもいるし、可愛いのもいる。）とか、自民党か社会党か（連立与党で良いじゃないか、仲良く、ひどく喧嘩していて可愛いじゃないか。何？景気が上らぬ？——やっぱりそっちは少しおゝどい党がやらんとどうもならんのだって？いゝじゃないか、そんなのその中に当り前になるだろう。脱線しました。）——その他色々な場合で。

学問の世界もそうなのであろうか？うん、自然科学だったら、全く平板・単純そのもの——だから、自然の人はさばさばした人が多い——特に数学はあやふやな、どっち付かずの答が出たら話が出来ぬ。All or Nothingが身上だろう。

ところが文化科学では、あゝでもある、こうでもあるということで満ちている。殊に言語科学——そこでは、ことば=人間、そして人間=複雑存在、人間のようにさばさばしていないものはいない——では、いや、でも、やはり決着を尊ぶのは、科学と名の付くものは全て同じか？幾分軟いこともあるか？ついつい、何々言語学、何々言語学と世に出てきては、規則化、規則化、即ち一般化、一般化とそればかり必死になっている——一般化（Generalization）ばかりやることは危険でこそある<sup>16)</sup>。

この両説、いずれも悪くない。そして、必ずや、この‘She’出現には両要因があったであろうことは誰しもうなずけることだ。

注16) その中に、そのことの科学を試みようと出来心が動くのだが——今後の研究の為のピーコンをこゝにも灯して置こう。

人間の言語が音からだということは、発生論的には常道であるが、もう一つの性質即ち文学言語からの影響も大変なものである<sup>17)</sup>。そして更に又両者が相互作用をして、更に増巾作用になって行く。

それでも、私は、僕は、自醸変化説がいつとか、重合変化説の方が良いと言う人は当然あってよい。そしてそれは出来るだけ学問的裏付けを求め、集めることによることだ。

注 17) 拙論 (1978 a) 「母国語人による母国語での幼児の第 2 言語教育はどの程度まで可能かについての実験的研究」香川大学教育学部研究報告第 1 部第 44 号、及び拙論 (1979) 「文字言語中心の早期英語教育——一つの実験報告——」同上研究報告第 1 部第 46 号、参照。

引用・参照文献

- Brunner, K 1960-62. *Die englisch Sprache*. 2 vols. Tübingen : Niemeyer.
- Mossé, F (J A Walker tr 1952). *A HANDBOOK OF MIDDLE ENGLISH*. Baltimore: The Johns Hopkins Press.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語史Ⅱ』「英語学大系 9」東京:大修館.
- 菅沼 惇編. 1989=1990. 『GENESIS IN 4 VERSIONS——OE, ME等への入門として——』大阪:大阪教育図書.
- \_\_\_\_\_. 1993. 『OLD ENGLISH HEPTATEUCHの言語研究』香川大学教育学部研究叢書 3. 高松:香川大学教育学部.
- Thorpe, B. ed. 1861. *THE ANGLO-SAXON CHRONICLE ACCORDING TO THE SEVERAL ORIGINAL AUTHORITIES. VOL. I. II*. LONDON: LONGMAN, GREEN, LONGMAN, AND ROBERTS
- Wyld, H. C. 1968 repr *A HISTORY OF ENGLISH* London: John Murray.